

## はじめに

インドネシアの地方で暮らしてみたい。そんなふうに思いはじめたのは、一九八七年にアジア経済研究所の現地調査で初めて南スラウェシ州を訪れたときだった。ちょうどそれまでに首都ジャカルタやジャワ島内を歩き、自分なりのインドネシアのイメージができた頃で、そのイメージを覆すような新しい発見やジャワとはまったく違う社会の空気を南スラウェシ州で強く感じたのである。「インドネシアはジャカルタやジャワだけではない」。私の、地方への思いは、一九九〇～九二年にアジア経済研究所海外派遣員としてジャカルタに滞在したときにいつそう高まっていった。しかし、それは浅はかな夢のように思われた。

その思いは幸いにも通じたのかもしれない。縁あって、国際協力事業団（JICA）長期派遣専門家として、一九九六年四月～九八年十月、および九九年三月～二〇〇一年三月

の約五年弱、あの南スラウエシ州の州都マカッサル（旧称ウジュンバンダン）に滞在する機会を得た（一九九五年十一月～九六年三月はジャカルタに滞在した）。「インドネシア東部地域開発政策アドバイザー」という肩書きでジャカルタの国家開発企画庁（バベナス）に所属するものの、マカッサルを中心としたスラウエシおよびインドネシア東部地域が仕事場であった。地域開発政策やその実践について地方政府、大学、民間実業家、NGOと議論したり、助言したりするのが主な仕事である。

そうした日常的な接触を通じて、ジャカルタの中央政府の論理とは違う地方の論理が存在することをしみじみ感じた。同じ開発問題を語る場面でも、中央から見た場合と地方から見た場合ではまったく異なって見えることがいろいろわかった。

しかし、ジャカルタや外国ではなぜ地方の論理が表に見えてこないのだろうか。理由は簡単である。地方は中央に対して地方の論理を真っ向からぶつけずに、中央の論理に合わせようとする。一方、ジャカルタの中央は自分の論理を貫こうとし、外国の機関はその中央としか接触しない。こうして、中央にも外国にも地方の論理は見えてこないのである。

地方に身を置く自分にとつて、この地方の論理を発信することも使命ではないかと思つた。所属先の国家開発企画庁には毎月出向き、インドネシア東部地域開発政策を地方がど

のように見ているかを伝えた。その報告の多くは驚きをもって受け止められた。

それと同時に、マカッサルに滞在しながら、ジャカルタから日本へ発信されるインドネシア報道と地方の現状とのギャップを痛切に感じていた。ジャカルタのタムリン通りの高層ビル街は、インドネシアの一部ではあるがインドネシアを代表してはいない。地方から見ると、ジャカルタはインドネシアのなかで最も特殊な場所に見えるのである。

多様性のなかの統一。これがインドネシアの国是である。しかし、インドネシアはこれまで多様性よりも単一性を優先させてきた。地方はジャカルタのようになるべきだという暗黙の認識があつた。ならば、ジャカルタとは違うインドネシアをもつと外へ発信することが必要ではないか。地方に身を置く自分ができることは、マカッサルやスラウエシのことを発信することではないか。いくつものインドネシアを伝えていくことではないか。そんな気持ちで本書を出版する動機となつたのである。

本書は、アジア経済研究所の月刊誌『アジア研ワールド・トレンド』の一九九七年一月〜十二月号に「ウジュンパンタンだより」として、また九九年五月〜二〇〇一年三月号に「スラウエシだより」として連載したエッセイに未発表分を加え、新しい変化も踏まえて内容を加筆、修正したものである。

連載を執筆した時期は、三三年間続いたスハルト政権が崩壊するなど、まさにインドネシアが大きく揺れ動いた激動期であった。そんな激動期にあつて、人々は世の中に翻弄されつつも懸命に生きていた。そして、明示的ではないにせよ、人々の考え方や地域社会のなかにさまざまな変化が現れていた。本書は、そうした激動するインドネシアのさまざまな側面を地方の外国人生活者の目で綴ったささやかな記録でもある。

毎月の締め切りに追われる『アジ研ワールド・トレンド』連載においては、専門家としての活動でたいへんお世話になつた国際協力事業団はもとより、国家開発企画庁、南スラウエシ州政府をはじめとする各地方政府、大学、民間実業家、NGOなどインドネシアの関係者、業務アシスタントだったミミ、リリ、イダ、イルハム、エディ、その他たくさんの友人や知人の助言と力添えに支えられた。また、帰国後の本書の刊行にあたっては、草稿を精読していただいたアジア経済研究所の佐藤百合氏からの貴重なコメントや、所内のインドネシア研究メンバーの仲間との議論、研究支援部研究編集課の岩佐佳英氏や斎藤輝夫氏からの励ましに支えられた。もちろん、言うまでもなく、五年間という長期にわたる休職を認め、スラウエシに滞在する機会を与えてくれた所属元のアジア経済研究所には心から感謝する次第である。なお、本書の記述内容に関する一切の責任は筆者にある。

はじめに

本書がスラウェシやいくつものインドネシアについての興味を引き起こし、そこに生きる人々へ思いを馳せるきっかけとなるならば、存外の喜びである。